

2015年3月15日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 22 章 24～34 節

説教：あなたのために祈りました

1 「仕える人のようでありなさい」と言われても

イエスは、26 節でこう語っておられます。「だが、あなたがたは、それではいけません。あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者ようになりなさい。また、治める人は仕える人のようでありなさい。」

「仕える者となりなさい。」何度も聞いてきたフレーズです。でも、仕えることはなんと難しいことか、と多くの方が感じています。特に努力とかがんばることは苦手ですから、無理をしないのでできる方法があるなら教えてもらいたいと思います。いつも言うことですが、イエスはできないことや難しいことを努力してやりなさいと命令する方ではありません。やれるからこう言ってくださっているはずです。どうすればできるのか。その答えがあるのかと期待してを読むのですが、話の流れがころころと変わり、よくわからないという印象です。

イエスが、前後の脈絡など関係なく語ることはありません。神のみこころが戒し遂げられていくために、美しい順番があり、時があります。ここにもそれがあるはず。「仕える人のようでありなさい」と言うとき、あなたがたは自分で努力してこうなりなさい、と言っているのではありません。あなたが仕える人となれるようにと、イエスはペテロをぐいぐいと導いておられる。ここはそのように見ることができます。

2 ペテロの心の動き

1) 大臣の椅子をねらう

そのペテロの心の動きに注目していきます。その前に、弟子たちがこの時どんな心の状態だったのか確認しておきましょう。イエスはエルサレムに入れ、その人気は最高潮に達します。この方はイスラエルに大きな奇蹟をもたらし、革命を起こす。ローマ軍を追い出し、神の国をここに打ち立て、その王座に座る。そんな期待がますます高まっていました。

弟子たちも同じ気持ちです。それは良いのですが、問題は次です。イエスが王座に着かれるとき、では大臣の席に誰が座るか。選ばれるのはあいつか、自分か。お互いに心の中で火花を散らしている状態です。

そんなとき、突然イエスがここに裏切る者がいると語りました。皆さんがその場にいた弟子であつたらどう反応しますか。ここで何も言わずに黙っていたら、自分が裏切り者として疑われるかもしれない。そんな不安が急に湧いていきます。「私は何もかも捨てて先生のために尽くしてきました。そんな私がどうして先生を裏切るのか。いや、絶対に裏切りません。」こんなことを言って、一生懸命自己弁護し始めるのではないですか。そして、攻撃の矛先をほかの弟子たちに向けていきます。「あいつはいつも怠けてばかりいたから、あいつが裏切り者ではないのか。」

この弟子たち、たとえて言えば、高い倍率の入学試験に合格するために必死にがんばっている受験生のようなものです。口では兄弟と言っていますが、お互いがライバルど

うしです。隙あらばほかの弟子の足を引っ張り、少しでも自分が有利になるようにしてのし上がる。だから誰が一番偉いのかという話になるわけです。

そんな雰囲気の中、イエスは突然、試験の合格発表を行います。29、30節。「わたしの父がわたしに王権を与えてくださったように、わたしもあなたがたに王権を与えます。それであなたがたは、わたしの国でわたしの食事について食事をし、王座に着いて、イスラエルの十二部族をさばくのです。」

ごくわずかな者しか合格できないと思っていたら、なんと全員が合格です。王権が与えられ、十二部族をさばく。こんなすばらしい約束を与えられ、弟子たちは大喜びです。

2) ふるいにかけて

緊張が解けてほっと安心した瞬間、イエスはまったく意外なことを語ります。31節。「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけてを願って聞き届けられました。」

麦は畑で収穫して実を取り分けます。今はすべて機械でやってしまいましたが、昔は木槌のような物でたたいたり、牛に踏ませるなどして脱穀します。しかしそのままでは、実の部分と殻の部分か混じっていますので、分ける必要があります。どうやって分けるかというと、風を使います。脱穀した物を箕(み)と呼ばれる道具に乗せて、上に跳ね上げます。風が吹くと、軽い物は飛ばされ、麦の実だけが下に残る。これが「麦のようにふるいにかけて」という意味です。サタンは、弟子たちをゆすって、吹き飛ばそうと願い、それが神に聞き届けられたと言っています。せっかく試験に合格して大臣の椅子をいただくこと

ができたのに、悪い道にはまっけてしまい、椅子から転げ落ちる、と言われたようなものです。みんなを喜ばせておいて、次の瞬間頭から水をかけるようなやり方です。

イエスは意地悪なのでしょうか。

これを聞いたペテロは、むきになりながら33節でこう主張します。「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」このセリフ、日本のいわゆるやくざと呼ばれる方々の決まり文句そのままです。「親分のためなら、たとえ火の中、水の中。このいのち差し上げます。」このときペテロは、嘘ではなく本気でそう思っていたでしょう。ところが、イエスはこう言うのです。34節。「ペテロ。あなたに言いますが、きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」この後、実際そのとおりになることは、みなさんもよく知っています。

3 仕える人となる

1) 「あなたがた」と「あなた」

ここまでペテロの心の動きを中心にしておいて見てまいりました。「仕える人のようでありなさい」と言われたことと、このペテロのことと、どんな関係があるのでしょうか。

ヒントは31節にあります。イエスが語りかけたのはシモン・ペテロなのですが、ふるいにかけてられるのは「あなたがた」とであると言っている事に注意してください。私は最初、このことに気がつかなくて、ふるいにかけてられるのは、てっきりペテロだけだと思い込んでいました。でもよく見ると、麦のようにふるいにかけてられるのは弟子たち全員です。

まずそのことを押さえてから、32節を見ます。「しかし、わたしは、あなたの信仰が

なくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」ここもよく注意してください。ここでは、「あなた」となっています。ふるいにかけてられるのは全員でした。ところがイエスは、ペテロのためにだけ祈ったというのです。あなたがたのために祈った、とは言っていない。「あれ、どうして？」と思いませんか。やっぱりペテロは特別なのでしょうか。確かに特別です。どうして特別扱いされるのか。入学試験で最高点を取ったからか。いいえ。逆です。「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております」と誓ったのに、その数時間後には「イエスを知らない」と言う。どこが優秀ですか。むしろとんでもない弟子です。試験を受けたら真っ先に不合格と言われるような、情けない弟子だからこそ特別扱いを受けるのです。

2) あなたのために祈りました

どんな特別扱いを受けたのでしょうか。二つあります。まず一つ目。「あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。」あなたのことなど知らないと三度否定し、ペテロは信仰を失いかけます。そのペテロのためにイエスはあらかじめ祈ってくれていた。

これは大きな励ましです。私たちだってペテロのことは笑えない。人前では、「イエスはすばらしい」と言いながら、隠れたところではそれとは正反対のことをしたり、考えたりしている自分です。ペテロとまったく同じことをしている。ところが、イエスはどうされるのか。そんな私たちのために、信仰がなくならないようにと祈ってくれていた。イエ

スが祈られたというのなら、それ以上のすばらしい守りはあるでしょうか。ありません。実際、ペテロはどうなりましたか。確かに三度否定はしました。けれども、よみがえられたイエスに出会ったとき、彼は信仰を取り戻し、大きく変えられていきました。なぜですか。イエスに祈られていたからではないですか。私たちも同じです。ペテロに起きたことは私たちにも起こるということです。

3) 立ち直ったら、兄弟たちを力づけなさい

ペテロが受けた特別な扱いの二つ目。「だかたあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」イエスが特別に祈ったのだから、あなたは必ず立ち直ることができる。立ち直ったとき、あなたには新しい役割が与えられる。兄弟たちもあなたと同じようにふるいにかけてられ、信仰を失いかけます。けれども、あなたは先に立ち直り、ほかの兄弟たちを力づけることができる。

どのようにして力づけるのでしょうか。主が十字架につけられたとき、私も進んで一緒につけられた。そのようにして信仰を守り通した。そんな話をして力づけるのですか。

反対です。「死んでもついていきますと言い張っていたのに、いざ主が十字架につけられると恐くなり、三度も「知らない」と否定し、一目散に逃げ出して主を裏切った者です。」言えることはそれしかない。主は、私が裏切ることを知っておられながら、こんな私のために祈っていてくれた。私のために主は進んで死んでくださった。私を責めることなく、すべて受け入れ、祈っていてくれた。それを伝えること、それが兄弟たちを励ますことになります。

「仕える人のようでありなさい。」どうし

たらできるのか。ペテロを見てください。自分の能力や力、努力を誇り、人の上に立ちながら兄弟たちを励ますのですか。そうではない。自分の信仰に自信をもっていました。能力も努力もしたし、自分は人よりも上だと思っていました。けれども、結局そんなものは何も当てにならなかった。風に吹き飛ばされて最後に残ったのはただ一つ、主を裏切ったという事実だけ。

そのことをもって兄弟たちを励ますのです。自慢できる話ではありません。最も恥ずかしい話です。ところが、「私は主を裏切りました。」その告白がほかの兄弟たちを励まします。そのとき、何をしていたことになるのか。仕える人のようになっていたのです。これは努力ですか。いいえ。そのままの自分を主の前に差し出すだけです。

主が教えてくださったのはそのような道です。